

青藍会会報

第105号

令和7年6月



徳島大学医学部医学科同窓会

Nothing is
Impossible!

K. SAIZYO Koichi SAI



吉野川中流域，川島

青藍会総会開催のご案内

日 時： 令和7年7月21日(月)海の日 10時30分～16時00分

場 所： ハイブリッド開催（青藍会館大会議室・Zoomによるリモート）

- 1 議 事（10:30～12:30） 終了後 集合写真撮影
- 2 昼休憩（12:35～13:20） お弁当を配付いたします
- 3 青藍会MD-PhD奨励金の授与（13:25～）
- 4 2024年度青藍会賞の発表及び授与（13:40～）
- 5 2024年度青藍会賞受賞講演（13:50～14:20）



三 橋 惇 志 先生（医学部62期）

徳島大学大学院医歯薬学研究部呼吸器・膠原病内科学分野特任講師

演題「腫瘍内fibrocyteの同定と新規がん治療標的としての展開」

座長 西 岡 安 彦 先生

- 6 学術講演（14:30～16:00 1人40分 質疑応答含む）

大 藤 純 先生（医学部43期）

徳島大学大学院医歯薬学研究部救急集中治療医学分野教授

演題「ARDSに対する人工呼吸管理」

座長 川 人 伸 次 先生

岩 佐 武 先生（医学部48期）

徳島大学大学院医歯薬学研究部産科婦人科学分野教授

演題「脳と生殖」

座長 苛 原 稔 先生

リモートでの参加をご希望の方はメールにてご連絡をお願いいたします

青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp

会場へお越しいただける方は6月27日(金)までに会報送付時に同封の「出席ハガキ」にてご連絡をお願いいたします

※昼休憩では「お弁当」をご準備いたしております

「外科医として日々思うこと」

東京支部長

石 井 保 夫 (医学部39期)

2024年4月から東京支部長を務めている石井保夫です。小松先生、上田先生という立派な先生の後に支部長という大役を務めることに重責を感じております。私は1993年（平成5年）に卒業し、東京女子医大腎臓外科に就職しました。腎移植、腎不全外科を専門とし、2015年1月から虎の門病院腎センター外科に勤務しています。

2024年7月15日（海の日）に青藍会総会に出席するため20年ぶりに徳島を訪れました。大学病院と県立中央病院が建て替えられ、校内には新しい建物が次々と新築され、以前の様子とは全く違う蔵本キャンパスに驚くばかりでした。そんな中、臨床講堂と解剖の講義棟が変わらず残っていたことに感激しました。テニスコートにたどり着き、練習をしている学生を見て、30年前の自分を思い出しました。真面目に勉学に励む医学生とはほど遠い自分も、軟式テニスだけは6年間一生懸命やりました。当時の軟式テニス部には2つ上の石倉さんの学年が3人、1つ上の学年が5人、私の同期が5人、1つ下の村尾くんの学年が3人、その下に速水くと桑波田くんがいました。5学年に合計18人の部員が在籍し、徳大医学部軟庭部の第三期黄金時代と勝手に名前を付けて、ひたすらテニスに励んだ時期がありました。西医体の個人戦のタイトル保持者である石倉・村尾組は別格でしたが、他の部員も粒ぞろいで、団体戦で全医体に行くことを目標にして日々練習をしました。ベスト8に進みましたがベスト4には入れず、団体戦での全医体出場は叶いませんでした。石倉さんは「団体戦で全医体に行きたかったけど、自分の下に15人の後輩がいたから、団体戦で全医体に出場する目標を持つことが出来た。それが楽しかった。」と話してくれました。地方の医学部の小さなテニス部でしたが、そこにはコミュニティがありました。誰にも頼まれていないのに、1つの目標に向かい皆で努力する。時に意見をぶつけ合い、喧嘩もする。それこそが部活動の醍醐味です。その経験が後の人生に大きく役にたつことを、後で実感することになりました。

私は徳島大学を卒業して30年が経ち、外科医としてのキャリアも30年を超えました。最近、日本では外科はあまり人気のない科とも言われています。技術の習得に時間がかかり、外科医になるためには時間と労力を大きく消費します。緊急手術の対応や外来フォローの必要性から長時間の労働を強いられるなど、仕事の内容としても決して簡単にこなせる科ではありません。そういう事情があつてか、外科医を目指す若い医師の数は減少傾向にあります。虎の門病院の研修医制度は、内科レジデント、外科レジデントを分けて採用するため、外科レ

レジデントは将来外科医になることを目指して就職してきます。私は1年目の外科レジデントに細かいことを教えたりはしません。糸結びや、持針器の持ち方、使い方などは私の部下の医師が教えたら良いと考えています。手術には一緒に入りますが1年目の研修医を直接指導することはほとんどありません。ただし、週末は病棟で研修医を指導することになっています。まず研修医に受け持ち患者さんの様子を聞きますが、あまり上手く答えられません。一緒に回診をして患者さんの体調や術後の創部を確認し、診察をします。研修医は病院に来ると、初めに電子カルテの前に座ってカルテを開き、検査値を確認します。ナースに頼まれた処方や指示漏れを追記します。残念ながら最初に患者さんの診察をしていないようです。どの患者さんの具合が悪いのかを把握していないため、その日に自分がやるべき優先順位を付けることが出来ないのです。これは極端な例ですが、他の研修医も然りかと思います。彼らは皆優秀で一人一人のポテンシャルは高いです。医学的な知識は豊富で最新の診断技術や治療法に関心が高いことは良いことなのですが、人にあまり興味が無いのでは？と時に憂慮する次第です。

医学はとても面白い学問で、医師は楽しい仕事です。外科医は休日もなく病院に来て、時には緊急手術になることがあります。ただ、こういったデメリットを補って余りあるほどのやりがいもあります。そうしたやりがいこそが外科医の減少傾向に歯止めをかけるきっかけになるのかもしれませんが。医学は進歩しロボット手術が主流となり、外科医の働き方はどんどん変わっています。しかし、人が好きかどうか、興味があるかどうかは、今も昔も変わりません。研修医の指導を行いながら、「将来、いいお医者さん」になってもらいたいと願う今日この頃です。

目次

○題 字	西 良 浩 一	
○写 真	檜 原 道 治	
○青藍会総会開催のご案内		
○巻 頭 言	石 井 保 夫	
○青藍会の助成活動		
青藍会奨励賞の授与		1
青藍会スポーツ奨励賞の授与		2
徳島大学病院卒後臨床研修センターへの助成	大 藤 純	4
○青 藍 会 賞 募 集		5
○新 入 生 歓 迎 会		6
○支 部 紹 介		9
○支 部 だ よ り		
近 畿 支 部	播 村 佳 昭	11
兵 庫 支 部	小 川 達 司	11
岡 山 支 部	松 田 純 子	12
広 島 支 部	望 月 慎 吾	13
愛 媛 支 部	原 田 雅 光	14
東 京 支 部	軒 原 浩	16
○特 別 寄 稿		
International Symposium on Herpesvirus: Clinical, Pharmacological and Basic Aspects を振り返り	塩 田 洋	18
○会 員 通 信		
「おい」を生きる	渡 辺 圀 武	22
AIによる医学・医療・社会への影響	板 東 浩	23
我が山の履歴書「日本百名山」—第10回青藍会兵庫県支部総会講演より—	松 田 聡	24
同窓会を愛した先輩を称え、21回目の同期会開催へ	本 田 壮 一	25
11期生第23回同窓会報告（最終会）	山 下 剛 利	26
医学部15期生同窓会報告	湊 省	26
医学部16期生同窓会（傘寿祝会）	四 宮 眞 男	27
徳島大学医学部24期生同窓会	大 串 文 隆	28
第7回はちはち会の報告	井 川 洋	29
青藍会香川支部丸亀部会の報告	石 田 孝 敏	31
WEB 同窓会を開催しました	山 田 博 胤	31
徳大医学部42期生同窓会（クンロク会）報告	水 島 浩 子	32
池上忠興君を偲ぶ	宮 崎 瑞 夫	33
田中啓二先生をしのんで	武 田 英 二・近 藤 彰	33
俳 句	小 谷 雄 二・雫 俊 一・駒 木 幹 正・真 鍋 正 広	36
○書 籍 紹 介		
「実践&実戦 rTMS療法うつ病編」	澤 田 和 之	37

○徳島大学の動き

徳島大学医学部長就任挨拶	橋 本 一 郎	38
徳島大学病院長就任挨拶	西 良 浩 一	38
徳島大学大学院医歯薬学研究部定年退職教授挨拶	勢 井 宏 義	39
	島 田 光 生	39

徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介

メディカル AI データサイエンス分野	渡 邊 謙 吾	40
---------------------	---------	----

○留学記	大 崎 裕 亮	41
------	---------	----

○徳島大学 MD-PhD コース同窓会報告	荻 野 広 和	42
	石 澤 有 紀	43

○青藍会学生広報委員紹介	安 倍 隆之介	44
	加 藤 碧	44

○青藍会の動き

青藍会出身教授一覧	45
医学部71期卒業生（令和7年3月卒業）	46
会 員 の 異 動	47
物 故 者	48
青藍会会費納入状況	49
会費納入のお願い・会費の納入について・振り込みについてのお願い	50
事務局からのお願い	51

○投 稿 規 定	52
----------	----

○第42回青藍会・医学科講演会開催のお知らせ	53
------------------------	----

○編 集 後 記	田 中 克 哉	
----------	---------	--

★支部総会開催のお知らせ

香川支部総会	令和7年6月14日（土）18時	リーガホテルゼスト高松にて
近畿支部総会	令和7年7月12日（土）17時	ホテルグランヴィア大阪にて
高知支部総会	令和7年9月6日（土）	高知会館にて
兵庫支部総会	令和7年10月26日（日）12時～15時	シーサイドホテル舞子ビラ神戸
岡山支部総会	令和8年2月7日（土）18時	ホテルグランヴィア岡山にて
東京支部総会	令和8年3月7日（土）17時	KKRホテル東京

各支部会員の先生方は奮ってご参加ください

会報第102号より「支部総会開催のお知らせ」を掲載いたしております。
支部総会開催のお日にちが確定しましたら青藍会事務局までお知らせください。

青藍会の助成活動

青藍会奨励賞の授与（2024年度医学科3年次医学研究実習優秀者）

2024年度医学科3年次 医学研究実習優秀者9名に青藍会奨励賞を授与しました。

青藍会奨励賞を受賞して

石 田 祐 也

このたびは荣誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。ご指導いただいた先生方、また実験や研究生活でお世話になった研究室の皆様へ深く感謝申し上げます。この8ヶ月間で得た貴重な経験を、今後の学習活動に活かしていきたいと思っております。

上久保 美 咲

この度は青藍会奨励賞に選出していただきありがとうございます。細胞生物学分野の米村先生をはじめ、医学研究実習に関わってくださった方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。研究実習での経験を生かし、今後も成長できるよう努めてまいります。

高 山 華 凜

この度は優秀賞を頂き、誠に名誉に思います。研究室の先生には大変お世話になりました。これからも精進いたします。

研究室の先生、関係者の方々に感謝の気持ちを込めて、これを私の一言とさせていただきます。

北 尾 有 梧

この度は青藍会奨励賞をいただき、誠にありがとうございます。お世話になった安友先生、有持先生をはじめとする生体防御医学分野の皆様及び実験動物たちに感謝し、この経験を糧に今後も日々精進させていただきます。

内 海 葵

この度は青藍会奨励賞をいただき誠に光栄に思います。ご指導くださった微生物病原学分野の先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。研究実習という貴重な経験をさせていただいたことに感謝し、この経験を活かして今後も精進してまいります。

大 濱 菜々子

医学研究実習を通じて、研究の基礎知識、手技、思考力や、論文を読む力を身につけることができました。このたびは、この成果を評価していただき、素晴らしい賞をいただけたことを大変光栄に思います。今後も学びを深め、社会に貢献できる医師を目指して努力していきたいです。

浅 井 大 輝

この度は青藍会奨励賞に選出していただきありがとうございます。医学研究実習を通して、ウイルスに関する知識を深めるとともに、実際の研究環境での経験からリサーチマインドを培うことができました。これにより、基礎医学に対する理解が深まり、臨床医学においてさらなる学びを得るための基盤が築かれました。

得 津 成次郎

表彰されたことを素直に大変嬉しく思います。ありがとうございます。また、青藍会の方々のご支援のおかげで、私たちはこのように整った環境で勉学に励むことができているということを改めて実感いたしました。また気を引き締めて来年以降も勉学に励んでまいります。

中 嶋 健 悟

この度は青藍会奨励賞をいただき、誠に光栄に思います。研究実習にあたり、ご指導くださった岡久先生をはじめ、関わってくださった全ての皆様へ感謝申し上げます。この経験を糧に、今後より一層自己研鑽に努めてまいります。



陸上競技部(西医体200m 1位・400m 1位・100m 2位)

松岡 久碧子(医学科5年)

この度はこのような名誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。今シーズンの400mに関しては、西日本インカレの標準記録を突破したり中四国個人戦で3位入賞したりと、日々の積み重ねが報われたシーズンになりました。しかし、西医体優勝という結果は特別に嬉しく感じます。来シーズンは学生陸上最後の年になるので、約15年の集大成として、全日本インカレ出場、西医体優勝を果たしたいと思います。



水泳部(西医体200m個人メドレー 1位)

吉田 恵(医学科1年)

この度、このような賞をいただき大変光栄に思います。一緒に練習に励んでくれた仲間や応援して下さった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。来年の西医体では、さらに成長した泳ぎができるように精進してまいります。本当にありがとうございました。

ソフトテニス部(西医体ペア準優勝)

浦田 有里(医学科6年)

この度は奨励賞を頂き、非常に嬉しく思っております。コロナによる3年間の大会の中止期間も、仲間と切磋琢磨し合い、大学6年生の最後の年に結果を残し、受賞できたことを誇りに思います。本当に、ありがとうございました。

水泳部(西医体50m背泳ぎ 1位・100m背泳ぎ 1位)

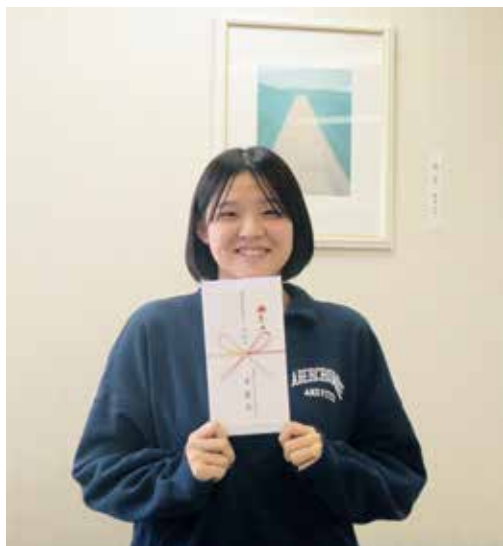
三久 翠子(医学科2年)

この度は青藍会スポーツ奨励賞を頂き、ありがとうございます。昨年に引き続きこの賞を受賞できたことを本当にうれしく思います。来年度に行われる大会でもよい成績を残すことができるように日々練習に精進します！

ソフトテニス部(西医体ペア準優勝)

宮内 こゆき(医学科5年)

この度はこのような名誉ある賞を頂き、大変嬉しく思います。青藍会の皆様をはじめ、たくさんの方々に支えていただき、この5年間部活動が続けることができました。今年で引退となりますが、今後も部活動での経験を活かし、より一層努力していきたいです。本当にありがとうございました。



徳島大学病院卒後臨床研修センターへの助成

徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告

徳島大学病院卒後臨床研修センター長
大 藤 純（医学部43期）

青藍会の皆様には、日頃多くの研修医の受け入れやご指導頂き、また卒後臨床研修センターにご支援を賜り、敬意と共にお礼を申し上げます。

卒後臨床研修センター長として運営に携わるようになり、およそ1年が経過いたしました。当センタースタッフの頑張りやきめ細かい対応の成果もあり、本年度の徳島県内の研修医マッチ者数は50名を超え、徳島大学病院のマッチ者数も13名に増加いたしました。ひとえに、県内協力施設の先生方のご指導や徳島県からの奨学金制度、徳島大学病院での初期研修医への給料増額など、多くのご支援があつての結果であり、深く感謝申し上げます。残念ながら医師国家試験に不合格となった方もおられますが、来年度には徳島県で初期臨床研修医として活躍してくれることを期待しております。

徳島大学の初期研修プログラムでは、大学病院ならではの高度医療を体験できるほか、県内外の研修病院や地域の診療所と連携し、初期研修に必要な症候や経験すべき症例に応じた研修施設を自由に選択できる柔軟性があり、また、卒後センタースタッフによる研修医一人一人の研修スケジュールや進捗状況、体調面への配慮など、きめ細かい情報共有がなされており、非常に恵まれた環境となっています。雇用面でも全国の国公立大学の中で最高水準の給料が支給され、市中病院にも劣らない雇用条件となりました。この1年間を通じて私自身を感じたところですが、徳島県内での臨床研修は、どの協力施設においても質・量ともに大変充実し、研修医の満足度も総じて高く、研修医へのケアも手厚い現状を考えますと、敢えて県外で初期研修をするメリットは無いのではと思います。また、来年度より、徳島県内で初期研修を開始したすべての研修医に対して、徳

島県から支援金が支給されることが決定しており、今後より多くの研修医が安心して研修できる体制が強化されることが期待されております。

近年では、初期研修に求められる経験すべき症候・疾病・病態、検査・手技、履修すべき診療科や研修などが多岐にわたっており、一つの研修施設で全ての研修を賄うことが難しくなっております。充実した初期研修を提供するためには、徳島県内すべての協力機関での教育や診療支援が不可欠であり、また、樺掛け研修や双方向性研修を通じて、研修医が徳島県内の医療機関を知り、県の医療ニーズを知ることが大切です。県内の医療機関には、それぞれに特徴や強みがあります。例えば、徳島大学病院では、特定機能病院として高度医療を経験できることや指導医が豊富であることが強みではありますが、市中病院に多い common disease の診療経験は不足しがちです。ただ、その不足する部分を無理に自施設で補うというよりは、各施設の特徴や強みを活かした研修を提供することに集中し、研修医が自らのニーズに合わせた選択をすることで、どこにも負けない徳島ならではの充実した研修が実現できると考えております。徳島県の医療を理解し、県内で研修医が育つことが、専門医教育以降の幅広いキャリア形成にも繋がり、延いては徳島県の医療を支える立派な医師の育成に発展すると信じております。

当センターでは、昨年度より、「徳島で、やろう！」をスローガンに、徳島県全体で医師を育てる ALL 徳島での研修を推進し、県内の若手医師育成と医療の質向上に寄与できるよう取り組んでおります。青藍会の皆様方には卒後臨床研修へのご理解と共に、ご指導・ご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

青藍会賞募集

2025年度青藍会賞募集

2025年度青藍会賞を下記のとおり募集します。

本賞は青藍会会員による学術研究の発展と奨励のために、若手研究者の優れた業績に対して授与するものです。奮ってご応募下さい。

1. 応募資格

2025年12月末現在で42才未満の青藍会正会員。なお、当該年齢に達する以前に産前産後の休暇取得または未就学児を養育していた場合は、その期間を加えた年齢未満とする。

但し、2025年度までの会費完納入者であること。

2. 審査対象

2021年1月から2025年12月までの研究業績を対象とします。

なお、選考では徳島大学で主として行われた研究であることを重視します。

3. 応募締切

2026年1月13日（火）（応募締切り後は提出書類の変更を認めません）

4. 応募手続

以下の書類を青藍会事務局へ提出して下さい。（原本とそのコピー 10部をご用意下さい）

1. 申請書（別紙様式1）
2. 履歴書（略歴）（別紙様式2）
3. 主指導者の推薦状（別紙様式3）
4. 原著論文（2021年1月～2025年12月末に発刊された原著論文；通し番号をつけ、年代の近い順に記載し、主たる論文3編には通し番号に○をつけること。主たる論文は筆頭著者の論文に限定しない。応募者には下線をひくこと。）（別紙様式4）
5. 主たる論文3編の要旨；申請者が論文の研究においてどこに寄与したかの記載を含めること。（各400字程度）（別紙様式5）
6. 主たる論文3編の別刷り（コピー可）
7. 競争的資金の獲得状況（2018年1月～2025年12月末までに獲得した研究費の名称、研究期間、研究題目、直接経費の研究費総額。研究代表者の資金に限る。）（2025年12月末時点で採択が決定したものも含む）（別紙様式6）
8. 今後の研究の展望（800字程度）（別紙様式7）

なお、同一推薦人が複数者を推薦する場合は推薦順位をつけること。

申請書等の各様式は青藍会事務局（seiran@tokushima-u.ac.jp）にご請求下さい。

5. 選考

青藍会会長から委嘱された選考委員会が行います。

6. 受賞者数

原則一名

7. 青藍会賞の授与

賞状及び研究助成金100万円の目録を青藍会総会開催日に授与します。

研究助成金は受賞者あてで教室への委任経理金（奨学寄附金）とする。

8. 受賞講演

青藍会総会開催日当日、受賞講演を行っていただきます。（30分程度）

お問合せ先 青藍会事務局 TEL 088-633-7109（内線2601）
seiran@tokushima-u.ac.jp

新 入 生 歓 迎 会

日時：令和7年4月7日（月）12：45～13：30

場所：基礎第一講義室

満開の桜もはれの日を祝福する中、青藍会主催の新生歓迎会が開催された。新生110名（男子55名女子55名）は、アスティとくしまで挙行された令和7年度徳島大学入学式の後、蔵本キャンパスに移動し、期待に溢れた表情で会場に到着した。小西竹生事務長の司会のもと、青藍会副会長丹黒章先生の祝辞に続き、滝沢宏光先生、江川麻理子先生より、先輩からの歓迎のことばが述べられた。会は終始和やかな中、盛会裡のうちに終了した。



令和7年度新生への祝辞

新生への臚（はなむけ）の言葉

青藍会副会長

丹 黒 章（医学部27期）

令和7年4月7日朝から快晴、桜満開のアスティとくしまで行われた令和7年度徳島大学入学式に来賓として参列したのち蔵本キャンパスでの青藍会主催新生歓迎会に出席しました。

医学科新生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

今日から皆さんは徳島大学医学部医学科の同窓会「青藍会」会員となります。

私が徳島大学へ入学したのは今から50年前です。まさにこの講堂で、高名な教授連の講義を拝聴しました。特に生化学は5人の教授からそれぞれ素晴らしい講義を受けたことを思い出します。1961年創設の徳島大学医学部附属酵素学研究所（通称酵素研）には全国から優秀な研究者が集まり、多くの新知見が世界へ向けて発信されました。工学部の中村修二先生はノーベル賞を受賞されましたが、医学部でもノーベル賞級の新知見が育まれ、今やそれが4つの研究組織を統合した「先端酵素学研究所」に結実しています。

戦時中の昭和18年2月26日、軍医養成のため新蔵

町にあった徳島市民病院を附属病院として徳島県立医学専門学校が発足します。初代校長に大阪大学医学部教授の中田篤郎先生が就任されます。昭和20年4月には官立に移管され徳島医学専門学校となりましたが、7月4日の徳島大空襲により新蔵町にあった附属病院が焼失し、医学実習ができない医専は廃校の危機に瀕します。せっかく医学を志しながら経済的理由で他校に転校できず医学を断念せざるをえない学生のため中田校長や県知事らの努力で蔵本歩兵第43連隊の兵舎を文部省に移管し、附属病院も建てるということで医科大学へ昇格が許され、新設された特設徳島高等学校（旧制理科乙類）に入学することで医学の勉強を続ける道が拓けました。かつて陸軍病院であった県立中央病院が大学病院に隣接しているのも、蔵本駅のホームが異様に長いのもここがかつて練兵場であった名残です。

昭和23年2月に徳島医科大学が設置された後、昭和24年5月に両校を吸収して学芸学部、医学部、工学部（薬学部の前身を含む）の3学部を有する国立徳島大学が設置されます。1973年に愛媛医大が開校するまで四国で唯一の国立大学医学部としてスタートしますが、今まで多くの名医や一流研究者を国内だけでなく世界に輩出し、四国内外の基幹病院でも多くの同窓生が活躍されています。

校内の中庭には中田学長の「学者如登山」の碑がありますが、学ぶことによりまだ見ぬ景色を見るこ

書籍紹介



このコーナーでは、正会員、名誉会員及び学内関係者の著書を紹介することとしています。専門家向けの書籍および一般向けの書籍を紹介していきたいと考えています。自薦、他薦どちらでも結構です。青藍会事務局までお送り下さい。なお、掲載については広報委員会にご一任下さい。



磁気刺激はうつ病の未来を変えるか？ 「実践&実戦 rTMS療法うつ病編」

(発行元 星和書店 2024年6月18日発行)

著者 澤田和之 (医学部35期)



2019年に中等症以上のうつ病患者さんに対して反復経頭蓋磁気刺激(rTMS)療法が保険適用となりました。その治療の概要(仮説)を簡単に説明します。まず多くのうつ病患者さんにおいて、左側の背外側前頭前野と呼ばれる部位の機能が低下していることがわかりました。機能が低下しているとは神経細胞のシナプス間のつながりが弱くなっていることを示唆し、うつ病の治療において、何らかの方法でそのつながりを高めることが有効でないかと考えられました。その中で考案されたのがrTMS療法です。左側の背外側前頭前野に高頻度の磁気刺激を繰り返し加えていきます。それにより前頭葉皮質の神経細胞に興奮が起こり、神経回路を通じて深部に信号が到達して脳幹からのドーパミンの放出を促します。この放出が機能低下を起こしている前頭葉の別の部位の機能を回復させ、その効果でうつ病で過活動になっている扁桃体が抑制されます。また刺激部位である背外側前頭前野の機能も次第に回復していきます。そして最終的に理性脳と呼ばれる前頭葉、情動脳と呼ばれる辺縁系、その両者の機能バランスが戻り、「うつ状態」から脱却できるという図式です。

セロトニンの作用を主として強める抗うつ薬の治療ではうつ病患者さんの三分の一に効果が見られません。その中にはドーパミンの作用低下を主とするうつ病も含まれると考えられます。そのような理由で薬剤治療抵抗性である三分の一の患者さんの40～60%をrTMS療法で寛解まで導くことができました。

このようにうつ病に効果があるrTMS療法ですが、実際に行っていく過程で慢性疼痛や強迫症、不安障害、パニック症などその他の併存疾患にも効果の見られることが次第にわかってきました。本書は私が勤務している鳴門シーガル病院で行った、rTMS療法のうつ病治療についての経験・考察を、実際に治療を受けた患者様のご協力を得てまとめたものです。脳腸相関など体と脳とは想像以上に密接に結びついていることが近年わかってきました。髄膜にリンパ管の存在が発見され、堅固さを誇るとされていた血液脳関門(BBB)が意外にもろいことも判明し、免疫と精神疾患との関係に注目が集まっています。会話中心の精神療法、向精神薬による薬物療法以外に、rTMS療法のようなニューロモデュレーション(神経修飾)と呼ばれる新しい治療法が登場し、今まで治療困難と考えられてきた精神疾患の治療への道が実臨床レベルでも開かれようとしています。あえて大学受験用の参考書か問題集のような書籍名にして、余談を交えながらできるだけ平易な言葉と内容で記述しました。精神科に興味のある青藍会の医学部生の皆様、あるいはこの分野に関心のある他科を含めた先生方に気軽に、気楽にお読みいただければ幸いです。

徳島大学の動き

徳島大学医学部長就任挨拶

徳島大学医学部医学科の発展を約束して

徳島大学医学部長

橋 本 一 郎（医学部34期）



この度、医学部長を拝命いたしました形成外科学分野の橋本一郎です。

私はこれまで主に広報関係で、青藍会の活動に携わってきました。令和4年(2022年)の青藍会会報100号記念号には、歴代の医学部長と病院長に集まっていたき座談会が行われ、その記録が特別企画として掲載されています。私は当時の編集委員長として司会をさせていただきましたが、国立大学の法人化や蔵本地区の教員組織の改編や改組など歴史的にも重要な談話を聞くことができました。その中では徳島大学医学部が、四国から日本全国、そして国際的にも医学生教育と医学研究を牽引してきたことを改めて認識しました。

先日、徳島大学が提案した事業が、文部科学省「令和6年度地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」に採択されました。本事業は我が国全体の研究力の発展を牽引する研究大学群の形成促進を目的としており、四国の大学では初めての採択となります。徳島大学における本事業では光工学と医学・栄養学および情報科学の研究力を集結することが謳われております。徳島大学医学部医学科が持っている強みを活かして、青藍会の先輩方がこれまでに達成された以上の成果を目指して頑張る所存です。何卒ご指導とご協力をお願い申し上げます。

徳島大学病院長就任挨拶

徳島大学病院長就任に寄せて：

世界に誇れる最新医療を提供・創造する大学病院

徳島大学病院長

西 良 浩 一（医学部34期）



皆様ご存知のように米国の一番優れた病院は、メイヨクリニックです。世界中の重鎮VIPが病気になったら自家用ジェットで訪れるとも言われています。日本人は、最高の病院と聞くとニューヨークやシカゴなどの大都会の病院と発想します。しかしながら、メイヨクリニックは、ミネソタ州のとても小さいロチェスターという街にあります。交通の便が悪い田舎にある病院が、世界一なのです。田舎度では徳島市もロチェスターに、負けていません。

私どもは徳島県における唯一の大学病院です。まず、県民の皆様へ「世界に誇れる最高水準の治療を提供する」義務がございます。もう一つの大きい役割は「未来の診断法・治療法を創る」ことです。より良い次世代医療の開発です。それこそがアカデミアである大学病院たる所以です。この2点を具現化することで、徳島大学病院が地域に根ざした世界に誇れる大学病院となり、さらに日本におけるメイヨクリニックになれると確信しております。私は、日本中から最後の砦と頼られるような病院になる日を夢見ています。夢を実現するために、病院長として粉骨砕身頑張ります。青藍会の皆様、ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

徳島大学大学院医歯薬学研究部定年退職教授挨拶

退職のご挨拶

生理学分野

勢 井 宏 義（医学部30期）

2007年1月から2025年3月まで、生理学（当初は統合生理学）分野の教授を務めさせていただきました。“生きる（理）ことわり”を医学部で探求し続けてこられたことは、この上ない幸運であり、今、深い充実感を感じています。

生理学分野では睡眠に加え生物時計も研究の対象としてきました。生物時計は視床下部の視交叉上核（Supra Chiasmatic Nucleus (SCN)）です。当時、仲間内では“SCN”にちなんで、科学雑誌 Science, Cell, Nature に論文を載せることが“仕事をした”ことになるという旗印のようなものがありました。そこで、浅はかに私も、SCN に論文を載せられたら（つまり仕事ができたら）報告の会（パーティ）を開くことにして、就任記念の会などは固辞してきました。そして今、定年を迎えましたが、私の実力の当然の帰結として、SCN はまさしく“夢”に終わり、最後まで会を開くことはできませんでした。応援してくださったみなさまには誠に申し訳なく思っています。

入学から数えれば47年、私はいつも徳島大学、そしてその変遷とともにありました。そこには背景として“時代”の推移があり、自分はその流れに乗り損ねたものであることを理解しつつあります。今後は、これまでの自分をじっくり省察しながら、次世代の支援に努めたいと思っています。徳島大学と青藍会の益々の発展を祈念しております。

退職のご挨拶

消化器・移植外科学分野

島 田 光 生

まずは、2004年に徳島大学に赴任して以来、21年間にわたる青藍会の皆様のご厚情に対して心よりお礼申し上げます。

私は赴任当初から、優秀で世界に通用する人材を教室から多く輩出することを肝に銘じ、「以和為貴」と「切磋琢磨」のモットーで、「Academic surgeon」作りに邁進してきました。理念は、単なる研究をおこなう「Researcher」ではなく、患者に真摯に向き合い探求を続ける姿勢をもつ外科医を育てることでした。手術教育は、独自のステップワイズ法を取り入れ、若手に積極的に執刀機会を与えるとともに **AWA spirits**（準備がすべて、患者は一期一会、守・破・離）という心構えを徹底させてきました。その結果、専門性の高い手術技術と学術的な業績を持つ Academic Surgeon を多く輩出できました。また“徳島大学への恩返し”と考えていた念願の青藍会賞を2022年から2年連続で受賞できたのは望外の喜びです。

結びに、2005年から旧第一外科、旧第二外科、心臓外科が一緒になった徳島大学外科同門会が発足し、現在やっと名実ともに理想的な姿になり、教授を含めて各教室員同士の懇親会や若い外科医のリクルートなどが積極的に行われるようになりました。今後、この外科同門会を中心に、多くの若い外科医が集い、優秀な Academic Surgeons として、徳島大学外科を益々発展させてくれることを確信しています。永い間、本当に有難うございました。

留 学 記

大 崎 裕 亮

留 学 記 (2023年 5 月 ～ 2024年 4 月, カナダ・アルバータ大学 (University of Alberta))

大 崎 裕 亮 (医学部53期)

このたび、徳島大学のご支援のもと、2023年5月から2024年4月までの約1年間、カナダ・アルバータ大学 (University of Alberta) に留学する機会をいただきました。留学先は Division of Physical Medicine & Rehabilitation/Centre for Neuroscience であり、Ming Chan 教授のご指導の下、臨床研究に従事しました。

私の主な留学目的は、MUNE (motor unit number estimation) をはじめとする電気生理学的手法を用いた臨床研究を学ぶことでした。Chan 教授はリハビリテーション医学を専門としつつ、神経筋疾患の電気診断にも深い造詣を持っておられ、ALS や重症筋無力症をはじめとする神経筋疾患の診療・評価に多く携わっておられます。

特に、Chan Lab で用いられている Multiple-point stimulation (MPS) 法は、運動神経数を定量化する MUNE の中でも信頼性の高い手法であり、将来的に徳島大学での研究に応用可能と考え、精力的に習得に取り組みました。

MUNE の理論的背景として、神経障害に伴う運動ニューロンの脱落が進行すると、生き残ったニューロンが隣接する筋線維を再支配 (collateral sprouting) することで CMAP (compound muscle action potential) の振幅が一見保たれているように見ることがあります。しかし、実際には機能的な運動ユニット数が減少している場合が多く、CMAP のみではその変化を正確に把握することは困難です。MUNE は、CMAP の総振幅 (または面積) を、平均的な単一運動ユニットの応答 (SMUP: single motor unit potential) で割ることにより、実際の運動ユニット数を推定する手法であり、神経再支配が



進行している病態においても、ユニット数の減少を可視化するという点で臨床的に極めて有用です。

臨床面では、Chan 教授の筋電図クリニックおよび神経外傷クリニックの診療にも参加し、ポストポリオ症候群、末梢神経外傷、脊髄損傷といった多彩な神経筋障害の診療を経験することができました。これらの疾患は、カナダでは比較的多くみられる傾向があり、診療現場での出会いも非常に印象的でした。末梢神経外傷や脊髄損傷の患者に対しては、形成外科医・整形外科医が担う神経吻合手術グループとの合同診療がなされており、このような多職種連携の手術・評価体制は、日本 (特に徳島) ではなかなか経験できない貴重なスタイルでした。神経生理評価が外科的治療戦略の一環として位置づけられている点も非常に示唆に富んでおり、今後の自分の診療や研究に活かしていきたいと考えています。

また、手根管症候群や肘部管症候群の術後フォローアップとして、MUNE や臨床スケールを用いた評価にも参加し、電気生理評価を用いた神経再生のモニタリング方法を学ぶことができました。さらに、動物モデルを用いた電気生理実験にも関与し、新たな測定法の習得に大いに役立ちました。徳島大学で進めてきた神経興奮性に関する研究テーマについても Chan Lab のメンバーと意見交換を行い、将来的な共同研究の可能性についても検討いただいています。

研究活動だけでなく、カナダでの生活も私にとって大きな学びとなりました。現地では、家族とともにロッキー山脈の国立公園 (Jasper, Banff など) を訪れ、壮大な自然の中で心身のリフレッシュを図ることができました。Elk や Grizzly などの野生動物を間近で見る機会もあり、豊かな自然環境とともに過ごす時間は、研究への新たなエネルギーを与えてくれるものでした。

この貴重な留学経験を通じて、国際的な研究環境での視野を広げるとともに、新たな知見や技術の習得、そして今後の研究展開に向けた重要な足がかりを得ることができました。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった徳島大学臨床神経科学分野の皆さまに、心より感謝申し上げます。帰国後は、留学中に得た知識と経験を活かし、今後の研究・診療活動に一層励んでまいります。

徳島大学 MD-PhD コース同窓会報告

第10回徳島大学 MD-PhD コース同窓会総会開催のご報告

荻野 広 和（医学部56期）

医学部56期、MD-PhD コース 3 期生で現在徳島大学病院 呼吸器・膠原病内科で勤務をしております荻野広和と申します。青藍会の皆様方には平素より本コースの発展のためご支援いただいておりますこと心より御礼申し上げます。さて本年度も2025年 2 月 8 日（土）に徳島大学 MD-PhD コース同窓会総会を開催致しましたのでご報告申し上げます。

今年度も昨年度同様、Teams を用いたオンライン形式で開催し、MD-PhD コース同窓生・現役生10名が参加しました。MD-PhD コース 1 期生の石澤有紀先生の司会のもと議事を進めました。荻野より、現在20名の同窓生（うち学生 4 名）がいること、令和 7 年度より新たに 2 名の進学者が加わる予定であることを報告しました。また 6 年前に本学医学部医学科に導入された総合型選抜「四国定着医型」で入学した第 1 期生がこの春卒業を迎えますが、これまでに 1 期生・2 期生よりそれぞれ 1 名ずつが MD-PhD コースへ進学し、さらに 3 期生より 2 名がこの春より進学予定であることを報告し、今後も MD-PhD コース同窓会が総合型選抜学生と積極的に交流することの重要性を確認しました。その他、同窓生同士の繋がりを維持するため、また医学科生や高校生、あるいはそのご家族に対して MD-PhD コースに関する情報提供を行うことを目的に、SNS を介した情報発信をこれまで以上に積極的に進める方針を確認し、そのための方法について話し合いました。青藍会の先生方におかれましても、次ページにアカウント情報を掲載いたしますので、お時間ある時に覗いていただければと思います。最後に参加者一人一人が自身の近況を報告しましたが、その中で石澤有紀先生が2025年 4 月より四国大学生生活科学部健康栄養学科臨床薬理学研究室の教授に就任されるという嬉しいニュースが共有されました。

日を改め 3 月 1 日（土）には、都合がつくメンバーが集まり懇親会を開きました。二次会では MD-PhD コース 1 年目の高麗王さんが働くジャズ

バーに赴き、普段とは違う顔で働く彼の姿を眺めながら、美しい音楽のもと楽しい時間を過ごしました。

また、例年は同窓会開催に合わせて開催しておりました魅力発信セミナーについてですが、本年度より医学部と協力し高大セミナーの一環として開催いたしました。医学研究の魅力を伝えることを目的とし、四国 4 県の高校生を対象に2024年 6 月 9 日（日）にオンライン形式で開催しました。Student Lab に所属し研究を続けている医学科 3 年生の柏岡富士子さん、MD-PhD コースへ進学し現在疾患病理学分野で研究を行なっている立花尚太郎さん、そして MD-PhD コース卒業生を代表し荻野よりそれぞれ医学研究の意義・魅力について講演を行いました。合計 16 人の参加者が得られ、いずれの講演に対しても活発な質疑応答がなされました。今後もこのような取り組みを続け、研究活動に魅力を感じてくれる学生を増やしていきたいと思います。

来年度は本同窓会創設10周年の節目の年となります。徳島大学 MD-PhD コースは2003年に第 1 期生が進学後現在に至るまで、継続的に進学者・卒業生を輩出しており、全国的にも評価されているシステムであると自負しております。この流れを絶やさぬよう同窓会としても引き続き努力していきたいと思えます。最後になりましたが、今後も本コースへの変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



第10回徳島大学MD-PhDコース同窓会

徳島大学医学部 MD-PhD コース同窓会は10周年を迎えます

石 澤 有 紀（医学部54期）

徳島大学医学部 MD-PhD コースは2003年度に開始し、今年で23年目を迎えます。本コースは基礎医学研究に従事する医師の減少が懸念される中、その養成を目的として整備されたと聞いております。当時、同様の制度を設けている大学は非常に少なく、制度があっても実際には活用されていない例がほとんどでした。一方本学では、制度開始以降進学者が途切れることなく（下表参照）、2023年からは四国定着型研究医枠からの進学も始まっています。これまでに計23名が本コースに進学し、医学研究に必要とされる基礎的能力とリサーチマインドを修得しながら、各自のキャリアを築いてきました。進学者数の実績は対外的にも高く評価されており、各種の大型外部資金の申請において、本コース学生への支援に言及いただくなど、学生の進学意欲向上にも大きく寄与しているものと感じております。

とはいえ、本コースは毎年の進学者がごく少数数のため孤軍奮闘となりがちです。そこで、在学生や卒業生の拠り所となることを目的として、2015年度に青藍会徳島大学支部の下部組織としてMD-PhD コース同窓会を設立いたしました（※本会はその趣旨に則り、卒業生だけでなく在学生も会員に含まれます）。年1回開催される同窓会総会では、会員による近況報告のほか、学内外のゲストをお招きし、キャリアに関する講演をお願いしています。この講演は学部学生だけでなく、県内の高校生やその保護者にも公開し、広報活動としての役割も果たしてきました。これら「近況報告会・魅力発信セミナー」の開催にあたっては、青藍会をはじめとする学内関係各所から多大なるご支援

を賜り、深く感謝申し上げます。コロナ禍以降、近年は残念ながらその規模が縮小しておりますが、同窓会員間の交流や情報共有は現在も継続しております。そして本年度、同窓会は設立10周年を迎えます。この10年間で、学内における本コースの認知度も着実に向上していることを実感しております。卒業生も各分野で研鑽を重ね、この春には多くの仲間がアカデミアでのキャリアアップを果たし、全国でその活躍の幅を広げています。

一方で、今後の課題として、遠方で研修に励む卒業生にとって近況報告会への出席が難しいこと、また徳島大学を離れる卒業生が増加する中、同窓会の事務局運営の継続が困難となっている現状が挙げられます。さらに、研究医の養成に加え、近年では徳島大学病院およびその関連病院での初期研修と大学院進学をセットで実施し、地域医療と医学研究の両立を目指す学生が期待されています。そうした学生に対し、本コースで得た知識や経験を活かしてどのようなキャリアが描けるのか、それを同窓会がどこまで支援できるかが、今後の大きな課題となると考えております。

創設以来、青藍会の皆様には進学や海外留学に際し多大な助成を賜り、会員の研究活動に対して温かいご支援をいただいております。会員を代表して深く感謝申し上げます。今後も研究医枠の学生に限らず、県内外から医学研究に興味を持つ学生の進学が期待されます。同窓会はこれからもそのような学生の拠り所として活動を継続する所存です。青藍会の先生方にも引き続き変わらぬご厚情を賜りますよう、この場をお借りして心よりお願い申し上げます。

年度	H15	H16	H17	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	R3	R5	R6	R7	合計
進学者数	3	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	23名

表：MD-PhDコース進学者数推移

MD-PhD コース同窓会 SNS アカウント

Instagram: https://www.instagram.com/tokushima_univ_mdphd_course/

Facebook: <https://www.facebook.com/tokushimaMDPhD/>

Instagram



Facebook



青藍会学生広報委員紹介

青藍会学生広報委員就任のご挨拶

安 倍 隆之介（医学科3年）



今年度の青藍会広報委員を担当させていただきます，医学科3年の安倍隆之介と申します。大学に入学してから早くも2年が経過しました。学業面では基礎医学を学び始め，ようやく医師になるための第1歩を踏み出せたのだと実感しています。特に解剖実習では実際にご献体を自らの手で解剖していくことで人体にメスを入れることの重みやご献体への畏敬の念を抱きました。3年生はより実践的な医学知識を学ぶようになり，研究室配属もあるため自分がだんだんと医師になっていくことへの不安感やワクワク感を感じています。広報委員としてそれらを少しでも皆様へお届けできるように頑張りますので，よろしくお願いいたします。

青藍会学生広報委員就任のご挨拶

加 藤 碧（医学科3年）



初めまして。この度青藍会学生広報委員となりました，医学科3年の加藤碧です。徳島大学生となりはや2年が経過し，大学生活があつという間であることを身に染みて感じています。1，2年では一般教養や，実習を通して医学の基礎を学んできました。周りは志が高く真っ直ぐで，私も頑張ろうと思えるような仲間ばかりで，刺激を受ける毎日です。今の自分があるのは今まで出会った人たちのおかげであつて，人との縁を大切に，恵まれた環境で大学生活を送れていることに感謝しながら，卒業に向けて邁進していきたいと考えています。今年度からは研究実習が始まり，勉強も基礎から臨床へと移行していきます。忙しくはなりますが，勉強以外のことも諦めず，将来周りの人の助けになれるように，多くの人と関わり，沢山のことを

経験して，実りのある大学生活を送っていきたいです。

不慣れな点もありますが，学生生活のことを知ってもらえるよう精一杯努めさせていただきますので，今後ともどうぞよろしくお願い致します。

青藍会の動き

青藍会出身教授一覧

(令和7年4月1日現在)

氏 名	期	大 学 名	講 座	氏 名	期	大 学 名	講 座
東 敬次郎	26	徳 島 文 理 大 学	看 護 学 科	遠藤 逸朗	38	徳 島 大 学	生 体 機 能 解 析 学
斧 康雄	27	帝 京 平 成 大 学	健康メデイカル学部	添木 武	38	徳 島 大 学	実践地域診療・医科学
下泉 秀夫	28	国際医療福祉大学	医 療 福 祉 学	上村 浩一	38	兵 庫 県 立 大 学	保 健 医 療 福 祉 系
宇野 昌明	29	川崎医療福祉大学	総 合 教 育 セ ン タ ー	友竹 正人	39	徳 島 大 学	メンタルヘルス支援学
横越 浩	30	四 国 大 学	生 活 科 学 部	桑原 知巳	39	香 川 大 学	分 子 微 生 物 学
石堂 一巳	31	徳 島 文 理 大 学	食 物 栄 養 学 科	前川 洋一	39	岐 阜 大 学	寄 生 虫 学 ・ 感 染 学
上野 修一	31	愛 媛 大 学	精 神 神 経 科 学	奥村 裕司	39	相 模 女 子 大 学	健 康 栄 養 学 科
赤池 雅史	31	徳 島 大 学	医 療 教 育 学	松浦 哲也	39	徳 島 大 学	リハビリテーション部
三上 靖夫	31	京都府立医科大学	リハビリテーション医学	井崎ゆみ子	39	徳 島 大 学	キャンパスライフ健康支援センター 保 健 管 理 部 門
原田 雅史	32	徳 島 大 学	放 射 線 医 学	大林 茂	39	埼 玉 医 科 大 学	リハビリテーション科
高橋 吉孝	32	岡 山 県 立 大 学	栄 養 学 科	埴淵 昌毅	39	徳 島 大 学	地域呼吸器・血液・代謝内科学
川人 宏次	32	自 治 医 科 大 学	心 臓 血 管 外 科	大塚 秀樹	40	徳 島 大 学	画 像 医 学 ・ 核 医 学
楊河 宏章	32	徳 島 文 理 大 学	看 護 学 科	山田 博胤	40	徳 島 大 学	地 域 循 環 器 内 科 学
吉栖 正典	33	奈良県立医科大学	薬 理 学	増野 智彦	40	日 本 体 育 大 学	救 急 医 療 学 科
二川 健	33	徳 島 大 学	生 体 栄 養 学	和泉 唯信	41	徳 島 大 学	臨 床 神 経 科 学
岡久 稔也	33	徳 島 大 学	地 域 総 合 医 療 学	若林 英樹	41	三 重 大 学	家 庭 医 療 学
浦上 淳	33	川 崎 医 科 大 学	総合医療センター外科	漆原 真樹	41	徳 島 大 学	小 児 科 学
坂東 良美	33	徳 島 大 学	病 理 部	加地 剛	41	徳 島 大 学	ウイメンズヘルス支援学
山口 文徳	33	愛媛県立医療技術大学	臨 床 検 査 学 科	大日 輝記	42	香 川 大 学	皮 膚 科 学
久保 宜明	34	徳 島 大 学	皮 膚 科 学	滝沢 宏光	42	徳 島 大 学	胸部・内分泌・腫瘍外科学
西岡 安彦	34	徳 島 大 学	呼吸器・膠原病内科学	森 宏仁	42	愛 媛 大 学	先進消化器内視鏡開発学
西良 浩一	34	徳 島 大 学	運 動 機 能 外 科 学	大藤 純	43	徳 島 大 学	救急集中治療医学
橋本 一郎	34	徳 島 大 学	形 成 外 科 学	堤 保夫	43	広 島 大 学	麻 酔 蘇 生 学
志馬 伸朗	34	広 島 大 学	救急集中治療医学	酒井 紀典	43	徳 島 大 学	高度先進整形外科診療部
篠原 勉	34	徳 島 大 学	地域呼吸器・総合内科学	池田 康将	43	徳 島 大 学	薬 理 学
田中 克浩	34	川 崎 医 科 大 学	乳 腺 甲 状 腺 外 科	北村 嘉章	43	徳 島 大 学	耳 鼻 咽 喉 科 学
高橋 章	35	徳 島 大 学	予 防 環 境 栄 養 学	酒井 陽子	43	徳 島 大 学	麻 酔 科 診 療 部
松田 純子	35	川 崎 医 科 大 学	病 態 代 謝 学	若田 好史	43	徳 島 大 学	病院情報センター
相澤 徹	35	高 知 学 園 大 学	管 理 栄 養 学 科	池本 哲也	44	徳 島 大 学	安 全 管 理 部
堀井 新	35	新 潟 大 学	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学	石川 正和	44	香 川 大 学	整 形 外 科 学
篠原 尚	35	兵 庫 医 科 大 学	上 部 消 化 管 外 科	伊藤 弘道	45	鳴 門 教 育 大 学	特 別 支 援 教 育
早瀬 康信	35	徳 島 大 学	地 域 小 児 科 診 療 部	森岡 久尚	45	徳 島 大 学	公 衆 衛 生 学
安友 康二	36	徳 島 大 学	生 体 防 御 医 学	岡田 賢	45	広 島 大 学	小 児 科 学
矢野 聖二	36	金 沢 大 学	腫瘍内科/腫瘍外科	辻川 哲也	45	福 井 大 学	放 射 線 医 学
井原 義人	36	和歌山県立医科大学	生 化 学	沼田 周助	46	徳 島 大 学	精 神 医 学
田中 克哉	36	徳 島 大 学	麻酔・疼痛治療医学	近藤 俊輔	46	東京女子医科大学	化学療法・緩和ケア科
岩田 貴	36	徳 島 大 学	創 成 科 学 教 育	島原 佑介	47	東 京 医 科 大 学	心 臓 血 管 外 科
上原 久典	36	徳 島 大 学	病 理 部	岩佐 武	48	徳 島 大 学	産 科 婦 人 科 学
岡本 康裕	36	鹿 児 島 大 学	小 児 科 学	中村 信元	48	徳 島 大 学	実践地域診療・医科学
栗飯原賢一	37	徳 島 大 学	実践地域診療・医科学	森垣 龍馬	49	徳 島 大 学	先端脳機能研究開発
小山 文彦	37	東 邦 大 学	産業精神保健・職場復帰支援センター	西 正暁	51	徳 島 大 学	実践地域診療・医科学
川人 伸次	37	徳 島 大 学	歯 科 麻 酔 学	梅原 英裕	52	徳 島 大 学	キャンパスライフ健康支援センター ア ク セ シ ビ リ ティ 支 援 部 門
中村 教泰	38	山 口 大 学	器 官 解 剖 学	石澤 有紀	54	四 国 大 学	臨 床 薬 理 学

※特任教授含む

教授にご就任された際には、青藍会事務局までお知らせいただけますれば幸甚に存じます。

投稿規定

広報委員会

○ 原稿について

- 必ず、文頭にタイトル、氏名・卒業期をご記載ください。
例 タイトル ○ ○ ○ ○ ○ ○ 山 田 太 郎（医学部○期）
- 文字数は1,400字以内、写真（カラー）は1枚でお願いいたします。
なお、写真には見出しあるいは説明文を必ずつけてください。
- 英数字は半角文字で、カタカナは全角文字で入力してください。
- 原稿の文中に登場する氏名及び敬称については、スペースを入れずに記載してください。
（例 山田太郎君 高倉健さん 松下幸之助先生）

○ 原稿及び写真の送付について（青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp）

- 原稿送付は、可能な限りメール添付または電子媒体にてお送りください。
プリントされた写真については、郵送にてお送りください。後日、返送いたします。
- 画像ファイルを送付される場合は、原稿とは別に、JPEG ファイル等でお送りください。
原稿（Word 等）に貼り付けますと、画質が悪くなります。
なお、画像ファイルの容量が大き過ぎますと届かないことがございます。容量を小さくして1枚ずつに分けてお送りください。また、青藍会事務局からの連絡がなかった場合は、届いていないことが考えられますので、再度確認のご連絡をお願いいたします。

○ 原稿の締め切り日を厳守願います（次号106号の締め切り日は令和7年9月26日（金）です）

会報の印刷および製本には、原稿をお預かりした後、ゲラ刷り作成、校正、修正、編集会議等で2ヶ月ほどの時間を必要といたします。

締め切り日より遅れた場合は、次号の掲載になりますので予めご了承ください。

○ 編集作業について

- お送りいただきました原稿は語句などに関して広報委員会で校閲させていただきます。その結果、修正をお願いする場合もございますことをご了承おきください。
- 用語や表記などの統一のために文章に手を入れることがございます。予めご了承ください。

○ 原稿校正について

- 広報委員会で会報全頁のレイアウト等を校正後、製本前のゲラ刷りを作成しお送りさせていただきますので、著者校正をお願いいたします。
- 校正時の大幅な追記、削除等は、会報発行期日に影響いたしますので、ご遠慮くださいますようよろしくお願い申し上げます。

第42回青藍会・医学科講演会開催のお知らせ

日 時 令和7年10月23日(木)18時30分～20時
場 所 徳島大学藤井節郎記念ホール(蔵本キャンパス)
座 長 岩佐 武 先生(徳島大学大学院医歯薬学研究部産科婦人科学分野教授)



講 師 ^{いばら き たもつ} 茨木 保 先生

医師・漫画家
いばらきレディースクリニック院長

演 題 「医学を描く
～Medical Cartoon よもやま話～」

茨木保先生ご略歴

1962年 大阪府東大阪市に生まれる
1986年 奈良県立医科大学卒業 同年 同大学 産婦人科医局に入局
1989年 京都大学ウイルス研究所で発癌遺伝子の分子生物学的研究に携わる傍ら、週刊ヤングジャンプ増刊号にSF短編「遠い手紙」を発表しプロデビュー
以後数多くの新人賞に入賞
医師として臨床医学に携わりながら、漫画家・イラストレーターとして医学書・看護学書を中心に活躍
1991年 奈良県立医科大学大学院医学研究課 博士課程修了
1995年 医学博士
1999年 大和成和病院婦人科部長
2006年 いばらきレディースクリニックを開設 現在に至る

著書 『まんが医学の歴史』(医学書院), 『まんが人体の不思議』(ちくま新書), 『がんばれ! 猫山先生』(日本医事新報社), 『サイチンゲール伝 図説看護覚え書とともに』(医学書院), 『患者さんゴメンナサイ』(PHP研究所), 『研修医山田(じゃまだ)君トリロジー』(三輪書店), 『発見! しごと偉人伝 医師という生き方』(ぺりかん社), 『間(あわい)～産婦人科医 那須悠介のカルテ～』(アメージング出版), 『北里柴三郎 日本近代医学を築いた肥後もっこす』(講談社) 他多数

◎TVドラマ化された人気コミック「Dr. コトー診療所」や「コード・ブルー ドクターヘリ緊急救命」などヒットドラマの監修を多数担当。漫画表現を用いたメディアと医学との融合に携わるマルチな活動を続けている。 公式サイト<https://ibaraki-manga.com>



最新の情報につきましては青藍会ホームページをご覧ください。

青藍会ホームページ

<https://www.seirankai-tokushima.jp/>

共催 青 藍 会
医 学 科

多数のご参加をお待ちしています。

編集後記

2025年は年明けからトランプ大統領の発言が波紋を呼び、世界中がざわつくスタートとなりました。ガザやウクライナでの紛争も長期化し、日本でも米の価格が2倍になるなど物価高が続いています。一方で、病院の経営は診療報酬が物価上昇に追いつかず、なかなか厳しい状況です。

4月には徳島大学の医学部長と病院長が交代されました。どちらも34期の先生方で、学生時代からお世話になった先輩たちが要職に就かれたことは、個人的にも嬉しく、頼もしく感じています。これからの徳島大学医学部・病院のさらなる発展を願うとともに、自分も微力ながら協力していきたいと思います。

今回の第105号では、各学年や支部での同窓会の様子がたくさん寄せられ、ページをめくるたびに懐かしさや温かさを感じました。学生時代に共に学び、笑い合った仲間とのつながりは、年を重ねてもかけがえのない宝物だと改めて思います。

青藍会を通じて、多くの先生方がこれからも連携を深め、それぞれの場で活躍されることを心より願っています。

田 中 克 哉 (医学部36期)

編集 広報委員 橋本 一郎 (34期) 大塚 秀樹 (40期) 工藤美千代 (33期) 田中 克哉 (36期)
沼田 周助 (46期) 原田 和代 (33期) 板東 浩 (27期) 森岡 久尚 (45期)
学生広報委員 安倍隆之介 (医学科3年) 加藤 碧 (医学科3年)

非 売 品

青 藍 会 会 報 第 105 号

令和7年6月3日印刷
令和7年6月10日発行

発行 徳島大学医学部医学科同窓会青藍会
〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15
電話 (088) 633-7109 (内線2601)
FAX (088) 633-3180 (青藍会事務室)
E-Mail seiran@tokushima-u.ac.jp
URL <https://www.seirankai-tokushima.jp/>
振替 01680-4-8671
ゆうちょ銀行 一六九店 (169)
当座 0008671 青藍会

発行者 青藍会会長 荒 瀬 誠 治

印刷所 グランド印刷株式会社

徳島市万代町6丁目20-15 電話 (088) 622-8448
